

日本語のレトリック

中村明編

これは人間の表現活動における素材としての側面がある。

それが表現活動を営むにあたっては、素材としてのことは、すなわち日本語の特徴を熟知したうえで、

言い誤り、誤字、文脈のねじれなどの病理的な現象についての対症療法的な書物も少なくない。

前者はともすれば専門的な記述に流れがちであり、後者はややもすると小手先の技術のみにとどまる傾きがある。

よい表現を志す読者にとって必要なのは、その両者を兼ね備えた読物ではないだろうか。

日本語の主語はしばしば省略されるとか、西欧語のような主語は存在しないとかいふことは、日本語の特徴としてよく指摘される。

主語が省かれると文意が通じにくくなるのは、どのような場合なのかを解説してくれたり、

この講座の中で、そのような要求にこたえるものとして置かれている。

「話しことば」が問題として取り上げられるときには、敬語の使用法が正しいとか正しくないかを論ずるなど、

的当な立論から見たものか、相手を上手に説得するには、どのような技法があるかといった技術的な観点から扱うかなど、

取り上げた人の主観的な判断に大きく依存したものが多かった。

通信手段が発達し個々人の話しことばを通してのコミュニケーションが重要な意味を持つようになってきた現代社会では、

この客観的な把握が重要な課題となってきた。話しことばを日本人の共有の文化財として、

情報活動のための基本的な手段としての位置づけを行わなければならない時代已到っている。

これを、単に話し方の技術や規範的な立場から扱うのではなく、話しことばそのものの姿、かたちを的確にとらえながら、

人間関係や話し場のとの相関で考察し、さらに書きことばとの関連などにも目を向けて、

るかきり総合的に広い視野から、話しことばをとらえようというのが本巻のねらいである。

現のスタイル□日本語の文章は例えば英語の文章とは違う。小説の文章は例えば新聞記事の文章とは違う。

講座 日本語の表現 □文章と違うのはもちろん、森鷗外の文章とも違う。

「坊ちゃん」の文章は「明暗」の文章と違うだけでなく、「吾輩は猫である」や「草枕」の文章とさえ違う。

が日本語で感じてきた長い歴史がある。そういう日本語行動の伝統のなかで個人がおこなった表現の軌跡には、

講座 日本語の表現 ⑤
筑摩書房

日本語のレトリック

中村 明 編

日本語のレトリック
講座 日本語の表現 5

1983年 5月31日

初版第 1 刷発行

編 者 中 村 明

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 東京 (291) 7651 (営業)

東京 (294) 6711 (編集)

振替口座 東京 6-4123 番

落丁・乱丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料は小社負担にてお取替えいたします。

©中村 明 Printed in Japan

印刷/厚徳社 製本/矢嶋製本

0381-15405-4604

日本語のレトリック 目次

とびらエッセイ 楽屋裏

小沼 丹 3

I レトリックへの招待

レトリックの悦び

中村 明 9

II レトリックの焦点

レトリックの功罪

波多野 完治 23

逆説という修辞現象

佐藤 信夫 36

逆説Ⅱパラドクス 通念と逆説
循環 意味の弾性

狭義の逆説Ⅱ対義結合
対義結合と同義

〈あいまい〉の美学—『雪国』を中心に—

川崎 寿彦 48

一、なにか 二、なぜか 三、反って、どうしてか反って

引用の理論

宇波 彰

61

引用の意味 引用としてのことば テキストとブレテキスト 芸術作品に
おける引用 引用か盗用か 引用と獨創性 表現行為としての引用 引
用の歴史性 引用の思想的背景 構造主義と引用 構造主義の限界
引用とポスト構造主義 構造の二つの欠陥 主体概念の崩壊 構造の閉鎖
性 静的なテキスト 構造・テキストの再検討 差異性を含むものとして
の引用 新しいテキストの成立

省略と反復

牧野 成一

73

一 随意的の省略と反復 代名詞化の表現効果 二 「穴あけ」による省
略現象 被省略要素と被反復要素 セット感覚による省略 三 敬体か
ら常体への移行 表現は省略である

直接表現と間接表現

安井 稔

88

間接表現とは何か スペードをどう呼ぶか 場面と表現の対応関係
間接表現と紛らわしい直接表現 表現の情報量 ぼかした表現の機能
間接表現はどうしてあるのか 混乱避けるための二原則 間接表現の機
能 間接表現の種類 協調の原理 如才なさの原理 不利益効果
命令表現と依頼表現 典型的な例 間接表現の解き方 意図された意味
結び 常に伴う不確定性

比喩的転換の方向と距離

半沢 幹一

106

- 1 話がピーマン——序にかえて 結びつける共通性 比喩的転換 方向と距離 2 方向 未知から既知へ・抽象から具体へ 転換の表現効果 対比の意外性 3 距離その一——方向づけの意外性 詩の比喩 意外性の度合 比喩の真価 落差のある表現の効果 4 距離その二——イメージの意外性 イメージの意外性 最大限の効果 結び 比喩への期待

視点の構造

今井 文男

124

- 見ること・見られるもの 過程図式 二重の目 遠から近へ・近から遠へ 時間の処理・見て廻りの処理 視点の複合(一) 視点の複合(二) 視点の拡大

時の表現 あるいは時と表現

沢崎 浩平

138

- 一 日本語の時制 日本語に時制はないか フランス語の時制 二 時間的距離と心理的距離 視点の移動 文体効果を生む変則 三 「た」止めの効果 過去の使い分け 攻撃された單純過去 日本語の單純過去 文学史的事件 四 時と表現 時間の喪失 言葉で表現できない時間

書き出しと結びの性格

林 巨樹

151

- 一 書き出しと結び 小説の神様の卓見 言語的表出の宿命 二 名作の書き出し 「結び」と呼応する「書き出し」 入学試験の出題 三文章の機構と書き出し 時枝誠記博士の考察 四 書き出しの種類

- (一) 即題法(解題法)
- (二) 題言法(前置き法)
- (三) 破題法
- (四) 引用法
- (五) 會話
- 法 五 結びの価値 大隈秀夫の指摘

III 技法再見

文体の中にある表現技法—小林秀雄を例にして— 中村 明

- 逆説の切れ味 複眼思考 対極の発想 論理の顕微鏡 見せかけの矛盾
- 答を求めぬ問い 連続否定の迫力 論理と感情のリズム 感動のレトリック

古典に学ぶ

- 一 日本最初の「レトリカ」 古典を「私」する 二 古典の表現効
- 果 「ほは笑み」の考察 源氏物語のほは笑み 三 「をかし」と「おもしろし」

秦 恒 平

方言の発想と表現

佐藤 亮 一

- 単語と表現 「しばれる」と「あずましい」 「おおきた」の用法 「申し
- わけない」と「気の毒な」 文例の方言訳 福井と大分の例 表現法の
- 地域差 禁止と命令—「きびしく」と「やさしく」の区別 「そっちへ行

くな」 やさしい禁止 命令表現 強調表現の種々相 反語的強調表現
現 悪態語に顕著な西日本 逆説的誇張表現

翻訳文の活力

篠田 一士

222

一 翻訳詩文と原作 翻訳の限界 二 衝突と創造の機縁 志賀直
哉の文章 大江健三郎の膂力 三 現在の情況は不振 必要悪だとい
う
覚悟

子どもは詩人か—大人のレトリックと子どものレトリック—永野 重史

234

一 幼児の隠喩的表現 二 隠喩理解の年齢傾向 (1)魔術的説明
(2)喚喩的説明 (3)初歩的な隠喩的説明 (4)真の隠喩的説明 三 隠喩の
理解と知的発達 四 疑似隠喩

IV 表現の可能性をさぐる

修辞疑問とその周辺 外国語の発想と表現—英語— 小黒 昌一

251

単語に意味を与えるもの 現象としての修辞疑問 修辞疑問の類例
効果抜群の潤滑油 「灰色の月」の英訳 日・英両国語の一断面 作品名
の訳語 レトリックと語彙 ミラーの疑問

日本人がとまどうフランス語の文法表現

なだいなだ

外国語の発想と表現—フランス語—

- 一 複雑なフランス語 二一 フレッシュマン、諸君 衆知冠詞
 - 三 フランス語の特徴は半過去 シムノンの世界 四 条件法 フ
- フランス語の冷たさ

表現の豊かさを支える詩

木村 浩

外国語の発想と表現—ロシア語—

プロセスか周辺か、それとも状況？ 詩こそロシア文学の主流だ 近代文語
 の確立者プーシキン 枕言葉を現代に復活させる

硬質で論理的なことば

福原嘉一郎

外国語の発想と表現—ドイツ語—

両極の対立 力としてのレトリック 第二外国語 ドイツ語の二重性
 話せばわかる 理由ある論理性 文体比較の可能性

日本語のなかの中国語

駒田 信二

外国語の発想と表現—中国語—

日本語とは何だろう 呉音 日常語は中国語 遣隋使 小野妹子 留学生
 たちの活躍 漢音と唐音 不思議な日本語

日本人の表現―その特殊性の行方を考える― 中村 明

300

日本的な表現の構造 めんどろみのいい言語行動 幅をもたせる非限定表現
現 即かず離れずの間接表現 ハッキリよりスッキリの省略表現 完結感
を避ける 感覚的なとらえ方 変化の速さと深さ 新しいスタイルの受
容 変化の限界 外国語と日本語

筆者略歴

311

装幀 向井周太郎 協力 西野博昭

日本語のレトリック

講座 日本語の表現 5

●全卷編集
水谷 修
中村 明
野村 雅昭

■とびらエッセイ

楽屋裏

小沼 丹

古い話だが、昔、林語堂の書いた「則天武后」と云ふ本を訳して或る本屋から出したことがある。林語堂、リン・ユウ・タンは永く米国に住んで達者な英文で沢山本を書いてゐる。「即天武后」も無論英語で書いてあるから、翻訳となると英語を日本語に直す。これは当然の話だが、この本の場合はその当然のことが簡単に片付かない。武則天は唐の太宗の妾の一人だったが、太宗が死ぬとその息子の高宗の妃を殺して自らその後釜に坐り込み、自分の息子を殺したり何千人と云ふ人間を殺したりして恐怖政治を行ひ、一時唐の天下を我がものとした。だからこの武后を扱つた林語堂の伝記もなかなか面白い。面白いのは結構だが、問題は固有名詞とか名称である。

欧米のものだと、人間の名前は大抵片仮名で表す。ナポレオン、チャアチル等、横文字の名前はその音に近い仮名で書くのが通例だが、この本の場合それが出来ない。出来ないことはないが、それでは困るのである。

例へば *Gowtsung* と云ふ名前がある。これをゴウツンと書いてもいいが、実は高宗のことだから翻譯の場合は高宗としなくてはならない。武后のことは *Lady Wu* と書つてある。これをウウさん、ウウ夫人で片付けて澄してゐては不可ない。

何しろ夥しい登場人物はすべて当時の唐の人間だから、而も實在人物だから、ちゃんと歴史に残る漢字の名前がある。その名前が中国音に従つて横文字で表現されてゐるから、もとの漢字に復元させるのが頗る厄介なのである。人名ばかりではない、官名、地名、建物の名前とか皆同じことで洵にややつこしい。中国語を知つてゐる人なら、横文字を見て、その音に相当する漢字を思ひ浮べることは比較的容易に出来るかもしれないが、それでも固有名詞となると問題が残る。例へば日本のイトウ・ヒロブミなる名前を伊東弘文とすると、明治の元勳が泣くかもしれない。

そこで手始めに、親戚の歴史の専門家から東洋史大辞典と云ふ奴を十冊ばかり借りて来た。それから、唐関係の参考文献も何冊か借りた。図書館からは唐の歴史の本である旧唐書、新唐書を借出した。更に中国文学関係の知人から、漢字の音訓表を借りた。先づ、例へば *Wu* なる字があるとすると、音訓表の *Wu* の項を見る。そこにはこのウウに相当する漢字が幾つも並んでゐる。武もあれば無もある。それから辞典とか唐書に当つ

て、そのとき、その場合に相当する人物は武であるか、無であるかを判断するのである。この場合も Wuji 無忌、Suliang 遂良の如き有名な人物だと割合簡単に見付かるが、有名でない人物だと大いに苦労する。林語堂は厳密に歴史に従つて書いたと云ふから、勝手に「伊東弘文」を作る訳には行かないのである。

これはたいへん手間の掛る面倒臭い仕事であつたが、やつてゐる裡にこつを覚えて次第に楽になつた。同時に謎解きの興味もあつて案外面白かつた。しかし、ひとつだけどうしても判らぬ奴があつた。巨大な建築を好む武后は明堂 Mingtang なる建物を造る。土台の周囲には鉄の排水溝がめぐらしてあつて、「そこを流れる水は遠く周の王朝の College (hyung) に因む文化繁栄の象徴と云ふ訳であつた」と書いてある。この byung が判らない。カレッヂだから大学だらう。周時代の大学を byung と云つたとは判るが、それに相当する漢字が見付からない。㊦に相当する漢字は幾つもあるから、その一つ一つを大辞典に当つて見るが該当するものは無い。周時代の教育制度に就いて歴史辞典には記述があつて、大学は出てゐるが byung は無い。周の大学で片付けてしまつても構はないが、これひとつだけ有耶無耶にして置くのは甚だ面白くない。

㊦に相当する文字に「辟」と云ふ奴があつて、これが何となく怪しいと

思ふが、手掛が皆無だから話にならない。或るとき、初唐の詩人駱賓王の詩を読んでゐて、必要があつて漢和辞典を用ゐた。頁を繰つてゐたら偶然「辟」の項が出たから、物は試しと見て行つて、大袈裟に云ふと心臓が、ごとん、と鳴つた。

「辟雍」なる言葉があつて、「天子の都城に設けた周代の大学」「四面に水を還らしてあり」云云とある。即ち *biyung* であつて、雍は *yung* に当嵌まる。このときはたいへん嬉しかった。或は専門家には何でもないことなのかもしれないが、門外漢の小生にはこの発見は大事件だつたと云つていい。それも当にしなかつた手近の漢和辞典に偶然見出したから、余計大事件と思はれたのかもしれない。

この発見で好い気分になつたのは事実だが、正直のところ、仕事が終つたときはぐつたりして、こんな翻訳は二度とやりたくないと思つた記憶がある。Miss Jenkins と云へば、ジエンキンズさん、で済む方が肩が凝らずに済んで有難い。大仕事を片付けた気がして酒場へ行つて気晴しをしたら、貰つた幾許かの金子はたちまち消えて跡型も無かつた。